

PDF issue: 2025-07-04

「組織とは何か」という問い : コミュニケーション比較分析の観点から

竹中, 克久

(Citation)

社会学雑誌, 17:206-222

(Issue Date)

2000-03-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

https://doi.org/10.24546/81010958

(URL)

https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010958



織とは何か」 という問

コミュニケーション比較分析の観点から

神戸大学大学院文化学研 竹 中 究科博士 克

意味は ン・メイヨー、フリッツ・レスリスバーガーらの人間関係 政治学では実存する「企業」あるいは「政治機構」を対象 済学では 政治学など様々な「学」が対象としてきたものである。経 織」というものは、 つの潮流であった。 織社会学は、 組織理論は展開される。他方、社会学が組織を語る かなるところに存在するのであろうか。 「市場」と異なるものとしての「組織」、経営学、 社会学の多くの研究領域のなかで、 社会学だけでなく、 しかし、 その研究対象である「組 経済学、経営学、 エルト 主要

はじめに

という命題を再考することを意図している。 という命題にアプリオリに隠蔽された「組織」 たい。すなわちそれは、 てしまったことに一つの原因があるように思わ り、「システムとしての組織」という組織観 会システム理論」を展開し、 何を「発見」すべきかを迷っている。それは社会学が てきた。 本稿では、 しかし近年、 常に一定の距離を保つことから新たな貢献を行 組織を自明視せず、「組織とは 組織社会学はその距離感覚を見失い 組織はシステムとして実存する、 他の学問との収斂を行うあ 何か」を論じ に過度に慣れ れる。 が実存する ま

機能主義的組織理論と解釈主義的組織

組織 理論 のパラダイム

組 織理 論 は 「組織とは何か」 という問いに答えられるだ

る逆機能の「発見」など、社会学はその当時の組織理論

(human relations) によるインフォーマル・グルー

あるいはロバート・マートンそしてアルヴィ

ピーター・ブラウらによる組織に

おけ

ン・グールドナー、

玥 にさら 組 る され 織 H 理 0 は 例 前 えば 論 たことは Ш ^ 12 0 目. ま 体的 問 て 成 題 15 111 JI. 提 組 は Ŧi. あ 起 か 織 次 . . は る……こと 0 0 よう 衝 は 七了。 擊 何 それ 的 to か 盛 7. 問 は Ш かい 2 は 題 あ 白 組 和 13 提 るが 夫に 明 織 起 で 2 な 根 あ 1 源 行 るこ 5 0 的 が常に た 存 な 7 か 0 在 間 Vi 的 よ 5 る から

確

元であ

法 に 主 存 18 た 0 かい 非 議 何 が非 論 专 義 論 Burrell 研 様 常 在 確 一会学 を始 かかか 社会とで 4 究 0 Z カン か 5 とし 常 なか 1 0 ٤ b 唯 D 科 的 4 in and 5 たちち 革 組 パラダイムと組 学 てギブ えに 件 ず ある 絀 哲学 命 Morgan,1979:xii= 彼らは、 で 理 < 主 うべ 2 特定 7 組 P かなら 論 意 実 61 織 0 あ 主 在 きも 対 方法 0 D 企 びに . 論 る。 に対 象 義 社 方法論 1 1X 15 公論なら 会科学 チで 0 7. 1 織 社 V 彼 かする研 7 3 あ 決 設 分 ル 会 B きる あ る。 研 析 . 定 たとギ 0 11 U 15 0 n 究 論 論 理 ラダ 性 _ E 究に 計 村 (邦題 論 + 組 九八 あ 質に 象 10 社会学の 象 反 13 織 b ラ V 1 社 7 7 実 ス あ 法 関 依 W は 7 会学 4 あ 証 拠 は 論 る 1 する諸 3 る È 組 1 組 依 0 Va 4 個 拠 豊富 織 織 b 組 0 着 かか 方 ば 性 理 理 ガ 仮 11 織 たも な方 法 実 定 る 論 İ 論 は 0 沭 0

主義者

2

Vi

3

四

0

0

10

ラダ

1

4

から

規定

3

る

ジ する 客観 者トか ぜ社 È 観 解 0 7 12 る。 之 義 拉 発 12 我者」 的 ラデ 展 う という二つの次元で そし 0 会 ま 1 便 13 主 E か る 0 から 次 宜 観 そし つラデ 対 口 7 元 1 的 を設 能 0 力 とに か 性を制 ギュ 0 方 大 ル・チ V 客観 1 定す 実 0 うきく ギ 関 力 ラデ 在 次 ュ ギ 心 とし 限 的 12 る 元 工 をも 7 V とし か . 1 主 1 1 チ パラダ V 阻 力 1 0 3 3 観 ギ 害す V I 0 11 維 2 ギ > 2 とさ E . 持 7 61 3 3 3 客 1 るよう チ 社 1 V う ラ 2 1 観 I n 会 V ムを整理 n とい デ 1 「ラデ ンジ 10 る > 0 る。 ラ う な諸 2 1 0) 3 性 デ 5 1 0 1 力 3 か 質 10 1 ラ 1 社 を 7 す 構 0) 11 力 2 デ 解ィカ 会学 n 造 理 社 . 関 次 釈主 ル ル から 会学 10 1 解 チ す 元 主 . I 力 C う る 義門 チ ル 人 は 諸 包 構 者,主-観 間 I 1 浩 、義本的 1 客 な 間 完 1

組 テ 組 テ コ 原 機 ムとし 総 4 " は 理 は、 能 か 1 論 主 . ステ チ ステムとして研究する正 義 0 19 研 影 I 者 組 1 究す ムで ス 織 7 理 から 10 3 あ 色 1 ラ 論 ズ 3 濃 7 は IF. . う Parsons, バ 1 統 1 ため 性 か ムに n tis + あ H. B ステ る あると考 1º 倒 几 1956; 1960] 統 的 0 性が 4 Barnard, 0) 理 10 か 集 えら ラダ な 中 論 家 1 7 組 は n 19382 織 組 る。 11 4 まり 10 る 0 理 うシ を う 論 1 家 9 ち か ス ス 0 0 11

的

注

定

寸

的

とい

う

应

つの仮定の

セット

としてとら

ば ある 展・ある 17.5% は てでは 7 6 組 主観 テ 正・ス・ 組 す。し テ・ 織 1 他 論 9る正統性が ・(Luhmann) それ 性• 4. 的 織 理 なら なく、 は は が. 理. 7 組 客 あ・論・ 何 現 織 は うも か 実とし 観 0 :/ 13 解 存在その・ 的に nn)」、 バ 釈主 レル とい 0 ステ・ 2 社 、[ex.; を 130 て構築され 0 義 ルとモ 7 2 1. 会的 よう 組織理論は ムを前・ 問 機 も・存 いうこと 能 1 13 事 の・在 な 18 をも を自 実 提• に対する解答が得ら 主 ガ ラダイ 組 人とし るもの」 ン 義 織 組・は 者 0 間 To 1 . 田月 観を導入 織•社 あ 7 15 視 7. to L 存在 ラ を・会 1 る b 理• 10 の観点か として描 ラ 前・シ 論. 4 ばば る ダ 1 なら 1 0 2 な。 提•ス するこ る 1 L に・テ 展。 1 な 5 4 7 対 1..4 E 0 .0 れるであ 0 説 Va 0 7 す。 とで、 出 て、 観 か 1 理•科 明 3. とし <u>٠</u> す 組 点 す 5 論。学 織 n 組 な。で

ノダイ 方で るこ 正 お 布在 統 1+ か ラダ は 的 ムであ frame るデビ 才 1 10 7 事 11 11 ラダ る他の三つ タナ 子実であ 依 4 V " of reference 拠 11 1: テ 1 組 7 織 7 4 る 1 F 7 理 7" Va ル るも 0) 例 論 T ti 15 7 あ 0 えば、 パラダ 1 1 君 な 1 n 12 0 かか 7 臨 異 としては、 よる 示唆する > イムが L でメインスト 端 解 0 続けて 的 釈 行 行 主 (heterodox) 诵 為 義 近 Vi 為 7 n 者 組 年 0 織 0 着 淮 主 機 1 1 0 10 目され 枷 ラダ 観 か 能 理 L 枠 一であ な 的 論 主 the 義

> た後 を展 対する当 に共 の定 1983; 点点は と他 う 理 から 的 ノメ 組 か ス n か 観 0 [Hassard, 欠け 7 義 論 開 る 0 0 にする 10 通する 織 解 0 高 無視 ラダ 議 をす して 形 0 1 批 t 0 か 的 組 1 釈 橋 交換 3 1 3 な 織 判 成 論 F な 0 ステ きた 1 点 3 7 K る 組 で 0 ボ 重 0 口 定 は、 3 かい n あ お 0 ス 織 4 あ 視 1) 構 1990;1993] 九 あ 委託 テ 力 A 観 義 か か K る。 す 7 る Và 造 ズムの見地 九八 との を よる 10 3 7 は 4 を行い 1 る 17 0 ル 的 は卓 な手 3 有 理 もつ有効 1 る 2 私 本 解 組 絶 2 は、 組 稿 か L 相 ス 効 論 う必 釈 ソンズを中心 13 織 对 では などがあげら 法を う テ 主 織 は 越 t か Fi. 的 0 主 要 否 2 L 組 本 義 理 4 理 義 structural さら ステ た有 性 性 稿 [Morgan, 係 理 8 織 用 Vi な 的 論 解 う を説 な 1 を否定する n な 論 12 観 10 から 10 P ラダ ステ 語 何を暗 6 観 るジョ 10 4 0 効 から は お Silverman, は 理 7 点 t 性 こう とし 3 12 0 あ をも 1 7 ことが n 組 て、 研 E 論 4 0 組 Frost ろう 結 有 0 織 織 とする 4 究 た機 る。 的 默 absolutism アウ から つ 0 に 2 . 視 効 てべ 0 0 解 ガ では 付 角 7 性 7 存 存 釈 前 司 能 1 11 and きる 自 ザー 1 在 在 から 主 批 提 様 主 n か Va 1970]′ 7 を な 身ら ta ると考え 義 判 義 5 0 Pondy, 前 ば 2 ま 的 的 機 者 1 " 対 1 0) 組 7 Vi 0 ステ な見 説 織 1 n 提 に 議 能 的 理 0 論 見 組 明 組

地

6

Va 4 義

織

る 地 味

ス

71 12 1) 観 織 6

記

0

ような

解

釈

主

義

的

組

織

理

論

と機

能

主

義

的

組

織

理

換えら は のように ンの特性によっ ミクロ という図式になる。 ニケー n 類型化された組織どうし る 組織」と解釈しているかに なコミュニケー ション分析」とい て特有 しれない のアウトプット/リスクを産 かい ショ ンの当事者たちが、 う枠組みを呈 のために は、 よって組織を類 そのコミュニケーシ 本 示 かする 稿 は 何 型化 内をど これ 出 比 す 較

0

収斂

ミクロ

社会学とマクロ社会学との収斂

でと言

11

織 0 メタファ

理論 イ・エ 目的、 てき う研 ような定義 を基準に組織の定義が行われることが多い。 の対比という見地からは明確な成員概念の、 [Parsons, 1956; 1958] らのシステム理論 そして成員といった概念を所与のものとして前 の見地からは支配 ーツィ マックス・ウェーバー [Weber, 1921-2]、アミタ 象を確定するために、 は充分なのであろうか。目的や支配 オーニ [Etzioni, 1961; 1964] ら構造論 ーナ かなるものであるのか。 理 — = [Barnard, 1938]' % 組 織を定義してはい ―服従関係、あるい 様々な組織の定義が行 従来より、 ない の見地からは それぞれ は組織と市 しかし だろう -服 1 的 ンズ 従関 この われれ 有 組 無 場 織

組織は目的をもつ」「組織には支配

— 服従関係

がある

n

かし、 定義 概念であり、そこから派 た概念の最たるものが、 とになる。 的にとらえられてしまうとなれば、それは問題をはらむこ 字義どおりに表現しようとしても、 唯一の手法であり、 いうこと自体がメタファーである メタファー 織 このメタファーがメタファーとしてではなく、 は 実は組織を語 その実存的にとらえられがち/とらえられてき る特定の成 を用いるのは社会学理論として不可 厳密には、 るメタファーであ 員から成立する」 組織理論における「 生 した目的、 メタフォリカルにではなく その「字義どおり」 奥山、 支配 る。 とい 一九九九]。 組織」という 0 服従関係 たこれ 欠か 之確 6 7

ニケー 関係 が、そしてルー ションの概念と不可分である「コミュニケーショ ソンズによって貨幣、 ア」、そして「情報」の両概念である。 ている。 ン・メディア 方向性を呈示したい。その際に着目すべきは、「コミュ このような背景の ケー ・ション」という単位現象であり、そのコミュニケー 成員などの概念を前提せずに、 1 3 本稿では、 ンのあり方とい マンによればさらに真 以下、 もと、 これら 権 単に 力、 本稿 影響力、 う観点から 0 メディアと称す) メディ では、 価値 理、 アを媒介に 組織を考察する一 目的、 コミュニ 組織を分 コミット 支配 ン・メデ 析する あげ ケー メント 服従 コ 0

1

0)

成員という概念である。

方向 性を示 L

タファ 枠組 成され 1) 議申 を可 から 2 能 をめ てきてい アソシエー 一て運 7 を提案す ていさせ 放ち ざして、 力とい る。 動とでも た。 る。 ショ 白 0 そうい コミュ 曲 かし、そのようなメディ たメディアの かし いうべき新 を獲得させ、 再び個人はその ニケー N P O 0 た新 って構成される、といるって、組織とはある特字ーション比較分析といる れたな組織 発 などとい い組織 達 組 は、 織 織 メディ を形 をも分析 か、 個 アに たか 人 を様 ヴォラン 成 たち 対す アに す できる 3 々 定・うの・手 で形 な呪 ラメ 7 異 呪

けであったり、 あ Va J 7 置 0 重 ミュニケ る 従 て論 要性 来よ じら は n とい 3 様 語 組織 n Z 員 6 その るものえ 、なメデ う 0 n 3 またコミュ K 合意を得 てきた。 かい おけるコミュ であ 1 のに分析の焦点を据え、 組 0 アのなかで「言 ニケー しか 織 13 0 る たり ため 7 と呼 議 L ショ = 論 ٤ な ば それ ケー 13 進 n 0 る現 に着 た手 本 語 は ショ め 報 目 た に主 象を構 目 段 的 ンと どのような 的 L 0 は た研 な位 達 13 13 重 う 成 成 主点を 究 要 コ 置 0 111

な本

分析対象となる現

象は

几

0

ま

口

1 0)

2

12

われる現象

そしてマ

・ーケッ ある。

> それ 几 3 のように れらが 0 う のシステ 現 う二つの 異 なる 周 1) 1 さら 辺 4 領 0) 0) 域 うち、 かをコ 現象を組 にはアソシ ムであ として :: 1 る。 E 織 1 0 と位 1 従 I ーショ ケー 7 口 来 1 置 クラシ 0 ケットやり づ 組 1+ 3 る傾向 ンの 1 そして新たな から とアソシ あ があ 1 方 ム争が、 か I 6

3 次 節 では、 0) 概念を整 する 本稿 よっ 7 重要であ る コ

1

た

コミュニケーションという観点

る

ケー ニュュ れを媒 はシステ 異なるの して成立してい ステムもシステムである限 構 ケ ニクラス・ル ニケー " 成要素で 3 介する では ムを形成するが 117 ショ かい アソシ コニ 組 な あ 1 織 13 0 ケー か。 であ ても を形 I 7 7 1 ンに ケー ショ 成 かし、 るとされ 1 その する、 よれ かに 3 その ンに りコミュ あ コミュ 同 ば、 3 は最 なか 2 らゆ 1) Ľ る。 1 1/11 12 • コ 低二 メデ うの であ るコ ジュ 1 ビュ = = ステム 5 ケ 山、 一人以上 る特定 ニニュ 1 1 が 1 ケー P 2 私 1 1 0 口 かい いう 0 E 3 クラシ 構 不 ケー 0 0 見 ンを要素と 成要 可 人間 3 加 コミュ 0 ンと 素 欠であ ショ 質 0 J

単位とする。 対象物に対しての自律性の有無によってコミュニケーショ である。互いに接触しているのはメディアと情報というニョンの担い手どうしは直接には接触していないということ もつものなのかを議論する。そして、メディアや情報 ンを分類したい。 ション・メディアを介した情報の発信 つの対象物なのである。 メディアがその て自律的に関わることの困難性を示す。 コミュニケーションの一 コミュニケーションとは、このようなコミュニケー しかし、 情報を送信 次項ではメディアとはどういった性質を 、ここで重要なのは、コミュニケーシ このメディアと情報という二つの 方の担い手が、情報を発信 他方の 担い手が情報を受信 1 送信 — 受信を一 に対

コミュニケーション・メディアの二つの側面

を確 ダブル・コンティンジェンシーという て語っており、メディアとは、①〈言語〉、②〈拡充メデ 獲得物であ ョン・メディア〉の三つに分類される。これらはすべて、 ィアン、③〈シンボリックに一般化されたコミュニケーシ 13 るのか。ルーマンは多くの著作のなかでメディアについ ションの危うくなる地点に立ち現れ、まさしく不確実さ 実さに変換させる機能に資している、進化上の獲得 ーマンによれば、メディアはどのようなものとなって り、ルーマンの言葉を借りれ 状況を脱するための ば、「コミュニケ

> は、 二つの側面をもつ。一方は社会秩序維持の装置として、 ・重要なメディアとして考えたいのは、③のシンボリック物』[Luhmann, 1984 = 一九九三:二五二] である。ここ物」 からである。 なかなかそれは容易なことではない。メディアとい や現実性を創造する自律的 装置として、である。しかし、解釈主義者のように、 方は個人の意味、 みなす。これら二つの立場からシンボリック・メディアは なメディア」[Morgan, Frost and Pondy, 1983:17] と び屋 (carrier) とみなす。 ルに対して、社会秩序を維持する、情報あるいは意味 ントである。モーガンらの見解では、 ここで重要であるのは、「シンボリックに」というポに一般化されたコミュニケーション・メディアである。 を「個人がそれらを通して自らの世界を創造する不可 個人のそのような自律性を圧倒したところに存在する 次項以下、「 現実性 (reality) 機能主義者」ルー な個人を想定しても、 しかし、 解釈主義者はシンボ あるいは世界創造 機能主義者はシンボ マンの見解か 実際には うもの 意味 0) 欠

ル

メディアの第一の側 面

らそのメディアの圧倒的な力を描き出

三つの次元で一般化されていることをさす。 ディアの、「一般化」 シンボリックに、一 とは時 般化 されたコミュニケーション・メ 間 的 事 項的、 貨幣を例にあ 社会的 という

渡って、 交換の 放され、 巡ってきたの メディアとは分離と結合を同時に可能にさせるものである すでに獲得することができる。 ニケー える必要もなくなるのである。メディアによって、 の貨幣が誰と誰の、どのような過程を経て、自らのもとに この貨幣というメディアに従うことによって、 要な場合には相手を取り替えることができる」ことである 交換のさまざまなチャンスを比較できる」ことであ [Luhmann, 1968:141 = 一九九〇:一四六]。つまり、 般化とは「もはや相手は不特定でもかまわなく、 ションの担い手は、 П それに付け加えて、これ またその貨幣がいつどのように 項 か、ということを考えるわずらわしさから解 的 現在の時点ですでに確保され 般化とは 、結合 「貨幣を用いることによって この側 の際の自由を、 から貨幣が誰 面 血だけ 使わ を強調 n 人々は、こ 分離 るの てい と誰の手に 、コミュ かを考 す 0 れば ·V.

メディアの 第二の 側 面

側 面 があ このよう その 側 側 面 0 面とともに 特徴を四 メディ 一つ掲 げ たい アにはもう一つ

(1)

他

0

価

值

0

中立

化

0

三四 貨幣というメディアに従うことによって、他の全ての価 という側面が存在する [Luhmann, 1988 = 一九九一:二 結 合の の側面としてはもともと結合してい 一二七八;春日、 沭 ための分離という側面であるならば、 0) 第 の側 面 が、 結合と分離を同 九九六:三四 たもの 一四八]。 時 E 4 可 を分離する 能にさせる 然ながら、 例えば、 値

的

化

とは

「貨幣に

よって、

未来に

お

1+

3

なっ 人間は は中立化されてしまうのである。貨幣に従うことによって の道徳的、 てしまったのである。 「別様でもありうる」 宗教的、 政治的等の 可能性を縮減してきたが、 価値 従うことは出来なく

(2) リスクへの変換

るリ いし 非常に多くのことを成し遂げ その責任の矛先如何による。 なり取り除くものではない、という特徴である。メディア 環境のせいにされ はそれ [Luhmann, 1988 決定の行われ 次に、メディアは 行為中止の結果とみなされる。 スクも大きくなる。 らを リスクに変換させるだけなのである る確率 1988 るが、 ― 一九九一:二六九]。危険とリスクは 不確実性や危険(Gefahren)をいき が極端なまでに小さくなるので リスクの場合には、 可 九 能性 る能力を与えるが、 つまり、 九一:二六九一二七二]。 0 貨幣や権 幅 が広い 危険は複合性の 自己 ために、 力は、 の行 を誤 為な 11

(3) 信頼への無根拠

ばならない。 うことの根 日頼する根拠はないまま、コミュニケーションは行われね になる。 か かに、 メディ 拠を問うことは不可能である。 またメディ しかし、なぜメディアを信 コミュニケーションの担い手は、メディ アを信頼 アに従うことを要請される。 すれ ば、 コミュ 頼 その がする = ケー メディ 0 か、 1 3 アを とい

(4) 情報の「置き換え」

ものではなくなっている。それはメディアの「自律性」に にコミュニケーションを操作する。 るコミュニケーションの「回路」ではなく、 よって「置き換え」られているのである。メディアは単 もはやその 0 なる情報の 後の特徴としては、 た情報がメディアによって伝達され メディアが運 「運び屋」ではないという事実である。 貨幣をは h だ情報は、 じめとするメディアは 発信者の情報と同 むしろ恣意的 たときには ts 単

行 抜け出すためのメディアは、確実に個人のメディアに対す ti 縮 減 確 ぬされ、 かに、 メディ 、た。しかし、コミュニケーションを確実に遂い手は確実なコミュニケーションをすること グブル アの 発達 ・コンティ 生によっ ンジ 7 「ありうる I ンシー 0 可 狀 能 態かか 性 B

> が置 る自 ディアと情報とい そういった意味で、 ケーションの連結先が事前に決定されている場合もあ という問 ョンのために、 き換えた情報に対しても、 題もある。情報を受け を侵害することになっ 再びメディアに乗せる際に、そのコミュニ う二つの対象に、 コミュニケーションの際に担い手はメ 取り、 自 律 さら 的に関 重に自律 次のコミュニケーシ わ はそのメディ れるかどうか、 件性を侵

る自律性の有無を機軸にコミュニケーションを考察する。次節では、このメディアと情報という二つの対象に対す

れることになる。

ニ コミュニケーションの際の二重の自律性

を分類すれば、 る自律性の有無を機軸にしてありうるコミュニケーション きた。そしてメディアに対 ョン・メディアの概念、 前 項では、 コミュニケーション、そしてコミュ 原理 的 に四つのコミュニケー 情報の する自律性 概念に 対 0 有 して見解を述 無 ションが 情報に対 ケーシ す

うことである。その基準を以下のように設定する。問題はその自律性の有無を分かつ基準は何であるかとい

(a)

メディアに対する自律性とは、

メディアのコード

かい

る

(b) か・コ な・ミ い・ユ 報 ニケ 1= 対 1 する 2 U シ うこと \exists 自 律 0 性 を基 2 連 結 は 準に 先 を選 情 す 報 択で る を 受 き 17 る 1= 余 後 地 に、 が あ・次

る・の

ば

3

をは する メディ かなる人に受 路を辿っ 0) (1) のよう 担 る。 デ 13 だろう か 何 じめとす 0 X 5 アを介 なる意 メディ 手と「直 1 な デ この 3 か アに対 1) 1 口川口 0 0 コ T 317 アに対 か全く る ま 情 指 在 味 ビュ をも され た最 報は 接 コミュ 令 することで、 対 = から 的 L もち、 ケー 情 1 てい 自 分 終 Va 4 7 報 7 -自 か 的 か 律 口 1 5 全体、 ショ ケー として クラシー < 13 なる人が 接 性 律 なな 直 0 はどのような経 触 から 3 性 ンが とし な か 担い 接 ショ L が かは、 伝 7 なく、 13 に接 を形 手どうし てどん 達されてく 連 発 4 > 自 るわ 鎖 全く不 信 0 2 分 され 0 成 して、 担 情 している 12 仕 す う なアウ 1+ 報 Va こと 事 る 7 明 路 は分離させられ では 手 1= なの を辿っ どの か Va 対 全体 くと、 自 0) は であ もう であ ような経 b 何 7 て、 2 " 0 を ŧ トに とこ る。 双方 意 企業 る。 自 方 Vi 味 律

幣

者 形

(2)0 メデ あ るコ 1 P に 11 ユ 対 ニケ L て自律 1 シ 性 3 が なく、 報 1= 対 7 は

規約 ディ 財であ て自 として受信 る。 れを反映する。 とい 貨幣 7 がい ンの 運び、 意 成する。 次 を基 であ T その きると 報 味 ラメ 連 る。 る。 連 でメ 性 が見 準 る ようなコミュ 結先を選択 ようなメデ メディ 対 置き換 ディ ところ するの 2 す デ コ 0 例えば、 1 場合 う 7 0) 10 7 1 アは だせ 117 きかを決定できる自 財 えたた 自 は F. 消 T は 費 律 に自ら関与することは不可 2 かず は 性は な 自 あ る 7 省 者はその価格 確 できるようなコミュ 1 对 0 ーニュ ケー 彼に る財 = 幣 情報を解 T 0) らの尺度で 実 コ 自 L を使 1111 残され 7 に ケー 7 律 とつ ニケー あ 取 を誰 に従うことし 0) 性は ショ る。 = 3 引 用 自 がを遂行り ってい ては様 4 か 釈 律 を誰 ショ 発信 K > 1 という な 性 律 る。 価 売 かが 0 は らら、 性を残 と取 ンの 格 n 々な思 連 次 3 な 発信者 メッ ニケ か た 0 ようとす 鎖 Va るべ 連 受信 とい できない Va は 7 か かい ニニュ 能 と欲 1 結 セ つそ 10 7 きか う数字 先 入れ 1 価 n 情 受 を自 ジを情 する 3 = n 0 ケ 報 ケー る n から 17 貨 に あ であ 変換 生 1 例 对 ま 2 X 報 貨 3 産 を 之 かず

か

仕事 どの

0

全体

义 置

から 埋

全く見えな

ように

n 価

流

ような位

D

込

ま

n

12

る

0)

か

は

択

0)

ある。

有無において異なっている。ない、という点では同じであるが、情報に対する自律性のない、という点では同じであるが、情報に対する自律性のユニケーションは、メディアに対しての自律性は双方ともつまり、ビューロクラシーとマーケットを形成するコミーのまり、ビューロクラシーとマーケットを形成するコミ

を意味しているのか。一方、メディアに対して自律性をもつ、ということは何

コードとコンテクスト

様々な社 を分離」するとい 離」であるといえよう。 ニケーションは、 全にコンティンジェントなものではない。そこでのコミュ ているというよりは、そのコードは解体されている アのコード化を免れるということである。 コンティンジェントな状態を免れようとしてい メディアに対して自律的に関わるということは、メデ コードのもつ性質を端的に述べれば、「結合のための分 そこでのコミュニケーションは、予想されるような完 と同 (機能的に特化したコードへの要請) 時に、 会的関係 新たに機能的に特化したコードによる コードと機能的に代替的なものに頼って の呪 う作業とセットである。メディアは、 縛から解き放つ(コードからの解 当然、それは「結合していたもの を行ってい コード化を免れ しか るの 呪 1

> ョンが わ を「特定化」する。つまり、メディアがどのような連 を「匿名化」するのに対して、コンテクストは前の担 ることになる。コードがコミュニケーションの前の担 なわちコミュニケーションの前の担い手の の作用を見せる。コンテクストに接するということは、 ユニケーションが、 「コンテクスト」である。コーそのようなコードに対して、 ちメディアに対 可能になるのに対して、「コンテクスト」は してのみ関わるだけで、コミュニケーシ コードのもつ分離作用によって、 コードを伴うメディアでの 機能的 に代 「顔」を見続 替的であ 全く逆 3 、すな コニ 0 す 手 手 は

性のないコミュニケーション(3)メディアに対して自律性があり、情報に対しては自律

辿ってきているのかに着目するのだ。

使用 としている。そこでのコミュニケーションは、 ってきているのかが重要なの 幸によれば、生活クラブ生協では、貨幣というメデ の連鎖はどのようなシステムを形成するだろうか。 メディアとの接触ではなく、その財がどのような経路を辿 そのような「コンテクスト」によるコミュニケーショ ションはアソシエーションを形成する しながらも、そこで扱われる財が単なる財では 」と呼ばれ、そこでは商 であ る。このようなコミュニ 品は匿名化を免れ 貨幣とい イアを 佐 7 藤慶 う >

1+ て コミュニケー 的であるた を形成するコミュニケー 的 だろう 3 うというこ ニケー 増 ロクラシ 作用 その とい 加するとい は E 次の 3 っその か。 ・うジ iV は う 連 I ため、 にはそ 性 結 7 1 要 前 連 ショ な情 0 銷 ること 質 1 先 V 化という 5 上、 ンマ 情報 る。 E は 1 0 非 コ 0 よう 111 報 ンと 常 質 3 性 白 7 常に ュ 2 かが 2 か に に多く見ら を 量 質 己 0 まり、 な情報 コミュ は は 可 0 から K 淫 1 あ 関 7 ショ カニ ケー たなな ビュ 性 あ 連 を 択 様 る L 能 61 定で るか ケー 質上 銷 用 П から 7 7 は ンは この = ズ 情報 1 能 かい 13 10 る。 シ あ B 対 性 だ。 白 4 7 長 る ケー n 口 2 くなな かする自 上をもち 現 る る現 П 0 0 ようなアソシ はどのよう クラシ 3 律 と密 その ショ と異 性を放 在 あ 0 自律性を計 マー メディアに対し 元象であ たり 前 コー れば 0 0) だせせ ーケッ 連 接 か 意 律 1 7 0 なり 111 -ドを用 棄 鎖 0 味 7 性 0 なるほ トを形 111 から 1 コミュ ば せざるをえな あ る。 転 コン な る 説 1 TK コ 7 I n この 基準 1 111 Li T 方が 明さ 付 4 Va 15 ナテク とい テクス 4 る 情 成 = 7 1 1 とし でする 決定 7 コ = 自 3 n E 7 量 文 律 ス I

> なる はど、 的 な協定 ケー なら などは 報 3 1 は とい 不可 多くなるの 0 扫 能 うの 10 手全て に \$ なるか であ 情 報 から る。 6 量 共 有 に 差 異 か 1 かず 司 そ 牛 量 0 情 情 n 報 は

摘されて

邁 |

なシ

理ョ

工想を

揭

げげ

7

スター

たこ

1

T

1

0

決定

的

な脆

性

は

前

より

指

である。 すれ その コミュニ いう現象 移行 て替 それ ために、 ば I する、 1 こわられざるをえない でも情報 ケー アソ は、 ビュ ション コミュ 1 1 とい コ ンテクストとい として 3 工 0 口 量 うことなの 1 クラシ = ション が増加す メデ ケーシ 機 1 能 1 が 化 す , るこ ば であ 3 バビュ アソ T から 起 か 1 うメデ とは とい 1 る。 こると コ ンテ アソ 工 口 う 1 クラシー 1 困 クス 原 13 = T 難 うの 理 3 は I 1 なっ V かい か 16 は 7 = ル する 大 てく 3 ルで 規 1. コ 0) 1 ため 模 る は P

でない は b た ば 0 にコミ そ n では なのであろうか。 にその るもの 問 問題もあ コー ケー テ 責 0 7 4 任 ドによるコミュ 認識 スト る。 産 0 所 3 などである。 それ そうでは ンでは、 在 がが よるコミュ 消 費者 還 は、 兀 ニケー され 公害 公害 なく、 か、 など では る。 は コー ニケー 4: コ 産 1: 1 3 負 者 E 1 ンが常に か よっ 3 生 か 0 から 公 産 消 絶 かい て分 共 問 費 対 1 題 財 的 有 離 わ 消 0 効 どち され と呼 優勢 費 本質

(4) あ る 1 コミュニケ 対 て 白 1 律 シ 性 = かい あ り、 情報に 対しても 自 律

の「信 得するか、アソシエーション化によって情報に対して一定 する原形態としてとらえるべきなの し、このリゾームをマーケットやアソシエー を寄せることが非常に困難である。その されるため、情報に対してもメディアに対しても「信 非常にコンティンジェントな状態である。 よって行われるコミュニケーションが連鎖する状態である。 能であり、またそのコミュニ その状態とは、コミュ マーケット化し、 の双方に対して自律性をもったコミュニケーショ これをリゾームと呼ぼう。 ニケーションであるが、 ィアに対 がそのまま維持されうるの 進 「頼」を置く、ということになると考えら 展に しても情 後のコミュ よってリ メディアに対し 報 ニケーシ ゾームを生み出 対 これは ケーションの連結先も自 しかし、 しても か、 一ケー 確 自 3 とい ては 1) ションもコンテクスト かに原理的 律 ン か、 0 性 出すコミュニーが、それともは ったことについては 一定の か あ ゾームというものは ため、 え見い り方、 メディア、 ショ 信 には存在 だせるコ 1) n つまり ケー ンに転 る。 1 情報技術 頼」を獲 ンが展開 已選 ショ ームは する。 択 、メデ 頼 化 山

ともかくも、現象としてのビューロクラシー、マーケッ

それ 0) る。そしてまた、 原 の不安定性といっ 理の相違による一種の オポチュニズム、 ように固 がために I 有 相互補完的に処理する関係にあると考えてい 0 1 コ ビュー 3 たものはそのコミュニケーションの構 ミュニケー アソシ 1) 「アウトプット/リスク」であり 口 クラシー I ショ 1 1 ムとい 1 ョン ンの の硬 構 0 脆弱 直 四 成 性 原 0 性、 理 0 上をもっ 7 現 1) 1 ケッ 7 成

おわりに

る。

―― コミュニケーション比較分析の有効性 ―

< あ 的 背景のもと、 つ つ 織 所以」(根源的メタファー)に をも を提供できるの た前提から議 る特定の成員 た理由としては、 を分析してみた。 以 さらにそのような議論を棚上げしたうえで つ」、「組織には支配 コミュニケー コミュニ 論を進めてきたところにある。 から成立する」 か このような手 今までの組 ケー ・ション その 3 対 (派生 服従関係がある」、「組織は 織 して何の 理 続 比較分析は \$ きを踏 論 0 的 から 0 メタファー) 組 あ 厳密な ま n 織 ね 組 0 議 組 なら よっ 織 織 論 とい は目 たる \$

例

る・向も・指 0 T コ 1 で自 F う b によって分離させられ、 の機能を果たすも の位 論を導け 置を見 失っ る かも た者に対 のとして、 L n な 組 L 織 V 111 事後的に設って与えられる 2 1 う 定され・方 体

メデ れよう 何 1 0 配 P 服従であるのか、 従関係に対 報から/への服従である、 しては、 という点が明確にされなかっ ったい とい 何か う見解 6 0 支配で、 か 得ら たが、

れるのではなくて、 成 導けよう。 いる範囲 お 員 いては、 織 がいるから、 0 成員、 従来の おいて、 というの 見解 そこで固 組織 古 有 7 0 異 to のコミュニケーシ ハなる分 有 成員であるのだ、 コミュニケー のコミュ 析 0) = 出 ケー 発 1 3 となる 3 ショ > が連鎖 比 う > 較 が行 分 組 織 析 わ 12 0

事者が、 理 出 は 「現実として感知する組 論 発点から議 のもつ システ 織 は ム理論 有効性 メデ て補完され 組 1 論 に代表され が始まっ とし 本稿 て自 る必 う 織 事 のようなコミュニケーショ 7 要があ なるも 物に 明 る Va で外 機能主 对 る 0 しかし、 して抱く 在する現象であると L 義者」パ 0) その 観 自 点 律 からの 性あ ラダイ システム理 るいは > ムで 織

織 0) 実 組 0 織 たる 織 所以 0 姿 から を棚 は 上げして組 n てい < 織 理 論 を とい 展 開 う 研 7

> 象は、 のような 組織とは何か」を問う試みの一つであると私は考えてい コミュニケーション比較分析は、 建 築物 時 間 0 ような 的に区切ら 空間 れた対象とは必ずしも 的な 限 そういっ 定や、 タイム た意 力 致

ド対

註

- 1 ニケーショ させる手段としてコミュニケーションをとらえてい ツイ 目 · 功利的組 例えば、 的や成 ションが適合的かという分析を行っているが、 オー 員を前提とせねばならない議論であろう。 ンの二つの類型を示し、 織・規範的組織) 1 [Etzioni, 1961] ナード [Barnard, 1938] に照らしてどのようなコミュニ は道具的、 三種の組織類型 は 表 出 成 員に 的と 目 強 う n コニュ 的
- 2 ショ と比較しようとする本報告では、「言 研究はコミュニケーショ ショ 例えば、 は分業による調整の ンは重要であるけれども、 ンを重視したい ハーバート・ によるものであり、 必要性から論じられる。 そこでのコミュニケーショ ンという概念に注意を払っ サイモンやジェームス・マー 貨幣や権力といったコミュ 7 語 ケット によるコミ などのシステム March ンとは主 千 E よる
- 3 織とマーケットと 1 1988; Williamson, 中 いう 九 比 七四 較研究は、 1975中 たちによる比 経営学の 経 済学 0 コ 新 制 制 度分 度

の重要な「周辺」対象と位置づけられている。 九九七、安田、一九九六』などによって、組織という研究対象九九七、安田、一九九六』などによって、組織という研究対象や、ネットワーク組織論[今井、一九八四、今井・伊丹、一九

- (5) 例えばAとBという二人の人間が取引というコミュニケーション・メディアを選択する。そしてみずかいうコミュニケーション・メディアに「乗せる」。これが発信である。次に貨幣はそのAの発信した情報を「価報を貨幣というコミュニケーション・メディアに「乗せる」。これが発信である。次に貨幣はそのAの発信した情報を「価格」という情報を得て、自らの価値と照らし合わせて取引格」に「置き換える」。これが送信である。そしてBはその格」に「置き換える」。これが送信である。そしてBはその「価格」という情報を得て、自らの価値と照らし合わせて取引を行うかどうか決定する。これが受信である。
- - (7) ルーマンは以下のように述べている。「貨幣価値の安定性と ければならないのである」[Luhmann, 1973 = 一九九〇:九二 にさらされていることを知っている。それにもかかわらず、彼 ている人間は、自分で修正を行うことが不可能であることを知 コントロールは逆に困難になったのである。……貨幣を信 頼からシステム信頼への転換によって、学習は容易になったが することは、はるかにむずかしくなっている。……人格的な信 やすくなっている。だがその反面で、(信頼を)コントロール 頼していく人格的信頼と比べると、比較にならないほど学習し 置いている。……システム信頼は、新しい人物をそのたびに信 動しているという前提のもとで、そのシステムの働きに信頼を 既知の人物に信頼を置いているのではなく、あるシステムが作 多様な使用チャンスの持続性を信頼している者は、 るいは自己解釈余地の有無によって自律性の有無を判断する つまり、メディアや情報という対象に対しての自己選択余地あ であるとされる [Luhmann, 1984 = 一九九〇:二二六]。 を自らの条件づけをとおして選択するという点において自律的 っており、 での自律性という概念は、ルーマン的な自律性の把握に近 あたかも強制されているかのごとく、貨幣を信頼し続けな したがって予期しえない環境の変化に直面する危険 基本的には
- 重要なものは情報である。情報は潜在的な共同取引者のいる場「運び屋」ではない。「物々交換において取引者が必要とする要な見解を述べている。ドッドによれば、貨幣は単なる情報の(8) ギデンズ門下のナイジェル・ドッドは貨幣と情報に関する重

三:括弧内筆者」。

- の見解によるところが大きい。(9) この「コンテクスト」の概念は金子郁容 [金子、一九八六]
- 九八]。 九八]。 九八]、一九八八、一九九六]を参照。また、三上剛史もアソ 九四]、一九八八、一九九六]を参照。また、三上剛史もアソ
- システムの戦略であるとしている[Luhmann, 1968]。 (1)例えば、ルーマンは目的を設定することが複合性縮減のための

文献

Barnard, C.I., 1938, *The Functions of the Executive*, University Press. (= 一九五六、山本安次郎他訳『経営者の役割』ダイヤモンド社)

Burrell, G. and Morgan, G., 1979, Sociological Paradigms and Organizational Analysis, Heinemann. (= 一九八六、鎌田伸一他訳『組織理論のパラダイム —— 機能主義者の分析枠組 —— 』

Coase, R.H., 1988, The Firm the Market, and the Low, The Univ. of Chicago Press. (= 一九九二、宮沢健一他訳『企業・市場・法』東洋経済新聞社)

Deleuze, G. and Guattari, F., 1980, Mille Plateaux: Capitalisme et Schizophrenie, Les Editions de Minuit. (= |九九四、字野邦

一他訳『千のプラトー』河出書房新社)

Dodd, N., 1994, The Sociology of Money: Economics, Reason and Contemporary Society, Polity Press. (= 一九九八、二階堂達郎 訳『貨幣の社会学』青土社)

Etzioni, A., 1961, A Comparative Analysis Complex Organizations: On Power, Involvement, and Their Correlates, The Free Press. (= 一九六六、綿貫譲治監訳『組織の社会学的分析』培風館)

一九六七、渡瀬浩訳『現代組織論』至誠社)

Gouldner, A.W., 1959, "Reciprocity and Autonomy in Functional Theory," in Gross, L. ed., Symposium on

Hassard, J., 1990, "Ethnomethodology and organizational research: an introduction," in Hassard, J and Pym, D. eds., The Theory and Philosophy of Organizations, Routledge.

今田高俊、一九九一、「ポストモダンの組織原理はありうるか」『組 Paradigms, and Postmodernity, Cambridge University Press.

織科学』vol.25-2

Press

域』東京大学出版会 ――」厚東洋輔他編『社会理論の新領ムの社会学をめざして ――」厚東洋輔他編『社会理論の新領ー――、一九九三、「自己組織性の社会理論 ―― ポストモダニズ

-----、一九九四b、『混沌の力』講談社 『ハイパーリアリティの世界 --- 二一世紀社会の解読』有斐閣-----、一九九四a、「近代のメタモルフォーゼ」今田高俊編

之他編『日本の企業システム④企業と市場』有斐閣今井賢一・伊丹敬之、一九九三、「組織と市場の相互浸透」伊丹敬今井賢一、一九八四、『情報ネットワーク社会』岩波新書

済』文真堂

おります。

おります。

おります。

な子都容、一九九六、『経済システム ── ルーマン理論から見た経済。

な子都容、一九九六、『経済システム ── ルーマン理論から見た経済。

文真堂

Luhmann, N., 1968, Zweckbegriff und Systemrationalität über die

——』勁草書房)

健·正村俊之訳『信頼』勁草書房)

Contingency," Loubser, J.J., Baum, R.C., Andrew, L., and Lids, V.M. (eds.), Explorations in General Theory in Social Science: Essays in Honor of Talcott Parsons (II), The Free

March, J.G. and Simon, H.A., 1958, Organizations, John Wiley & Sons, Inc. (=一九七七、土屋守章訳『オーガニゼーションズ』ダイヤモンド社)

一九九一、春日淳一訳『社会の経済』文真堂)

イ ――」『社会学評論 四八』 三上剛史、一九九八、「新たな公共空間 ―― 公共性概念とモダニテ

Morgan, G., 1990, "Paradigm Diversity in Organizational Research," in Hassard, J. and Pym, D.(eds.), *The Theory and Philosophy of Organizations*, Routledge.

Morgan, G., Frost, P.J. and Pondy, L.R, 1983, "Organizational

Symbolism," in Pondy, L.R. et al.(eds.) Organizational Symbolism, JAI Press Inc.

奥山敏雄、一九九九、「組織の社会学理論におけるメター野中郁次郎、一九七四、『組織と市場』千倉書房

味」『組織科学』vol.33-1 奥山敏雄、一九九九、「組織の社会学理論におけるメタファーの意

Parsons, T., 1956, "A Sociological Approach to the Theory of Organization," in *Structure and Process in Modern Society*, The Free Press.

Formal Organization," in *Structure and Process in Modern Society*, The Free Press.

---行為論の展開---[新装版]』早稲田大学出版部佐藤慶幸、一九八二 [一九九四]、『アソシエーションの社会学

ブに集う人びと ――』文真堂

盛山和夫、一九九五、『制度論の構図』創文社――――、一九九六、『女性と協同組合の社会学』文真堂

Silverman, D., 1970, The Theory of Organisations, Basic Bools,

高橋正泰、一九九八、『組織シンボリズム ―― メタファーの組織論Inc., Publishers.

富永健一、一九九七、『経済と組織の社会学理論』東京大学出版会

——』同文館

世良晃志郎訳『支配の社会学Ⅰ』創文社) 世良晃志郎訳『支配の社会学Ⅰ』創文社)

Williamson, O.E., 1975, Markets and Hierarchies, Free Press.

(=一九八〇、浅沼万里・岩崎晃訳『市場と企業組織』日本評

論社)

からの挑戦――』木鐸社
からの挑戦――』木鐸社